

2月19日神戸新聞朝刊防災新聞欄に1月にEARTH 隊員として能登半島地震支援に派遣された小寺先生の取材記事が掲載されました。



EARTHとしての活動紹介と小寺先生自身の経験からの学校再開支援や職員生徒の心のケアなどあまり表に出ない内容が掲載されていました。大変なご苦労をされたことと、その当時の状況を今後の動きとも合わせてご報告いただける機会を作らねばと思っていますところ。また同日朝刊1面には「能登半島地震においてボランティアのあり方が問われている。発災1ヶ月が過ぎても災害ボランティアセンターを通じて活動しているのは2739名。阪神・淡路大震災では62万人だった。」との記事が掲載されていました。「行政が混乱と捉え、すべて管理したいという空気が・・・」と続き、難しい局面を迎えていると実感しました。阪神・淡路大震災では道路に面したところと少し奥まったところでの避難所の支援物資の届き具合が違いました。また、ボランティア

の入り方も変わってきたことから一括管理で人手が足りないところに配置することが進められました。発災直後のスピード感からいうと地域性(交通状況など)もありますが、一括管理での配置となるとできるようになるまでに時間がかかり、そのときの状況に対応しきれない部分が出てきて、被災された方々の苦しい時間は長くなります。実際、阪神・淡路大震災時は混乱はしましたが、避難所運営においては随分と自主的なボランティアに助けられたような気はします。場所によっては、被害状況が大きくなかなか現場にたどり着けないことから今回も半島の先の方まで入りにくく、混雑を避けるため個人でのボランティア参加を見合わせるような指示もされていました。仕方が無いこととはいえ、歯がゆい思いをしている方は被災された方にも、ボランティアに駆けつけたい方にもたくさんおられると思います。難しい問題です…。さらに、二次避難で中学校、高校の生徒たちが被災地を離れ生活をしている状況について「地域を守る」という視点で考えると一緒に立ち上がるために離れない方が良いのではないかという意見と実際に生活できないし、学習面でも遅れるのはどうか、教員も学校に行けない人もいることから賛成する意見とがあると思います。私も修学旅行中の阪神・淡路大震災でしたので、旅行先から帰るときに親戚の家に行くといって京都あたりで下車する生徒もいました。当時は被災地を離れるのはどうかと思いましたが、色々な考え方を尊重し、その生徒にとって一番良い方法を家族で考えられた結果だと今なら思うことができます。正直なところどの考えも間違いではないし、正しい選択だと思えます。何が正しかったかは、随分後になってからわかるような気もしますが、そのときどう判断するかは状況にもよりますし、厳しい選択を迫られることもあり本当に難しいです。また仮設住宅の建設場所も東日本大震災、能登半島地震では小中学校の敷地に造られることが多いように感じました。阪神・淡路大震災では少し離れた使われていない土地に多くの仮設住宅を造ったのですが、コミュニティーの問題や高齢者の孤独化が問題となりました。これも、学校から考えると仮設住宅が建ってしまうと解消には時間がかかり教育活動に支障が出る期間が長くなるのでできれば避けて欲しいところです。しかし、地域柄そうもいってられないところもあり、こちらも難しい問題です。

このように考えてくると、地震はあるもので減災にどのように努めていくかが本当に大切になってきます。しかしながら自分のこととして捉えられないところもあり、「まだ良いだろう」「ここは大丈夫だから」など防災教育を行う上でも肝心なところが周知されていなければ実際の場面に対応できません。国や県がやること、個人でやること、一緒にやることなどしっかりと整理して、南海トラフ巨大地震の備えを進めておかねば、実際に起こったときに同じことを繰り返してしまいます。環境防災科を持つ本校としてはそのあたりを今後しっかりと考えて本校の活動も多くの方々に知ってもらうことで防災、減災を広く報せることができるようにしていかなければならないと思っています。

2月20日は2月15日に行われた推薦入試、特色選抜入試の合格発表がありました。環境防災科40名、先進理工類型10名の発表をしました。合格した皆さんには入学準備として課題に取り組んでいただきます。また残念ながら不合格になってしまった皆さんは、次の複数志願選抜入試に向けて頑張ってください。

2月21日からは1・2年生の学年末考査が始まります。いよいよ令和5年度の締めくくりです。新学年に向けて良いスタートを切るためにも充実した学習期間を持ってください。3年生は来週の卒業式に向け体調を整えましょう。

